様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０７２０
研究課題名（和文）物語共有による発達障害大学生の経験的学習の推進－Web 支援システムの構築－
研究課題名（英文）Promoting the experiential learning by story-sharing in university students with developmental disabilities -Construction of the Web-based support system-
研究代表者
齋藤　清二　（SAITO SEIJI）
富山大学・保健管理センター・教授
研究者番号：７０１２６５２２

研究成果の概要（和文）：物語共有の場における経験的学習を推進することが、発達障害を有する大学生に対する心理・社会的支援として有用であるという暫定仮説に基づき、Web サービス（PSNS：Psycho-Social Networking Service）が構築された。PSNS は彼らの日常経験や想像上の経験を意味づけ、自由に表現することのできる、物語共有の場として機能した。PSNS 上で交流されたテクストをデータとして、彼らが自らの経験を意味づけつつ学習することへの支援を通じて、どのような自己変容的プロセスが展開していくかについての質的分析を行い、発達障害大学生のための新しい支援モデルを提案した。

研究成果の概要（英文）：Based on the working hypothesis that promoting the experiential learning in the field of story-sharing is useful in psycho-social support for university students with developmental disabilities, a Web-based support system designated Psycho-Social Networking Service (PSNS) was constructed. PSNS worked as “Ba”, that is shared context in motion, where the students could make sense on their experience both in daily life and imagination. Qualitative analyses were performed on the data collected from the texts exchanged on PSNS, which described how their transformative process had been unfolded. A model of support system for university students with developmental disabilities was proposed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文・社会
科研費の分科・細目：臨床心理学・心理臨床的地域援助
キーワード：地域援助、発達障害、Web 支援システム、質的研究

１．研究開始当初の背景

発達障害とは、何らかの生物学的な要因による中枢神経系の障害のため、認知やコミュニケーション、社会性、学習、注意力などの能力に偏りや問題を生じ、現実生活に困難を来たす障害である。近年では大学生の数%がこの障害を持つと推定されている（福田，2008）。大学生で問題になる発達障害は、(1) アスペルガー症候群を含む高機能広汎性発達障害あるいは自閉症スペクトラム障害

(PDD/ASD)、(2)注意欠陥多動性障害(ADHD)、(3)学習障害（LD）に大別される。研究代表者の齋藤清二は心身医学・臨床心理学を専門とし、1983年から大学生の心理支援、学生相談に関わる研究を継続し、人格障害、不登校、身体表現性障害、摂食障害などの多彩な大学生の心理相談・心理支援に関する研究報告を行ってきた（斎藤, 1991, 1993, 2000, 2005, 2006)。このような研究を継続する中で、近年「最近の大学生の傾向」として語られている学生像が、発達障害の特質と共通することに注目してきた。高機能の（知的能力の遅れのない）発達障害者の大きな特徴として、他者との社会的関係の形成が困難であり、興味や関心が特定のものに限られることが挙げられる。一般に彼らは対面での関係形成が苦手であり、特にある程度の親密性を持った集団行動を好まない傾向がある。これは彼らが、いわゆる「場の空気（コンテクスト）を読む」ことが苦手であり、非言語的にコミュニケーション情報の解読を要求される場での「生きにくさ」を自覚しているためであると思われる。しかし彼らの多くは、テクスト情報を秩序立てて精緻化し、利用する能力には長けており、個性的で創造的な表現活動を行う能力をも有している。このような彼らの特性を「矯正」するのではなく、彼らの特性が生かせるような多元的な環境へのアクセスを保証することが、彼らへの支援として有効であると思われる。一方で齋藤は、保健・医療領域における、物語（ナラティブ）を利用した経験的学習についての研究を行ってきた（斎藤, 2000, 2002, 2003, 2006)。経験的学習理論（Friere, 1974、Kolb,1993）によれば、事実とは固定された不変の要素ではなく、省察と経験とのフィードバックを通じて、常に形成され、改変され続けるものである。物語は、経験的学習の豊かな素材であり、学習者の物語は、共有された共通の経験の意味が摺り合わされ、新たに意味づけられるための媒介物となる（Greenhalgh, 2006)。このような物語の共有（story-sharing）の機会は、発達障害大学生が経験している困難な日常の出来事への意味づけを促し、彼らが持っている能力の偏りにバランスをもたらし、ひいては日常生活のスキルをも向上させる可能性がある。研究者らは、富山大学において、大学生および教職員に限定して提供されるWeb サービスである Psycho-Social Networking Service(PSNS)を利用し、特に社会的コミュニケーションに困難を持つ大学生を対象とした心理社会的支援サービスを行って来た(斎藤,2008)。本研究は、このPSNSをフィールドとして、発達障害大学生に対する、物語共有による経験的学習を通じての心理教育的支援システムを構築するためのアクションリサーチである。

２．研究の目的

発達障害大学生は、毎日のキャンパスライフにおいてどのような日常を経験しているのだろうか。また彼らは、自らの困難な経験とその克服をどのように日々物語的に意味づけているのだろうか。このような彼らの「生(なま)の物語」を表現する場を提供し、それを社会的な対話の場の中で共有することが、本研究の最初の目的となる。この目的を可能にするために、発達障害大学生にPSNSに参加してもらい、彼らが現実に抱えている問題をサポートするための環境を作る。彼らが自らの経験を意味づけつつ学習することへの支援を通じて、どのような自己変容的プロセスが展開していくかについての質的分析を行い、Web システムを用いた発達障害大学生の支援プロセスを明示化し、大学における発達障害学生に対する新たな支援システムのモデルを提案することが本研究の目的となる。

３．研究の方法

本研究は、大学のキャンパスライフにおいて、社会的コミュニケーションに困難を抱える大学生の支援という現在進行形の実践の中で行われる研究であり、研究と実践を分離しないアクションリサーチの手法をとっている。そのため、本研究は基本的に質的研究法を採用し、以下の４つの研究を行った。

（１）【研究１】Web システムの構築と運用に関するアクションリサーチ:2007年から2011年３月までの、富山大学における Web 支援システム（PSNS）の活動を対象として、実践とデータ解析のサイクルによるアクションリサーチを行った。

（２）【研究２】大学新入生はどのように Web 支援システムを利用しているか？：大学生の Web を通じた物語的交流の実際を描写するために、主として PSNS に新たに登録した新入生が、どのように PSNS を利用しているかについて、PSNS 日記に投稿された１年間のログをデータとして質的分析を行った。

（３）【研究３】Web を通じた物語と対話に基づく大学生への健康支援に関する研究：大学生が抱える健康上の問題に対して、Web 支援システムを通じた物語と対話がどのように貢献しているかを検討するために、事例研究を行った。

（４）【研究４】コミュニケーションに困難を持つ大学生へのナラティブ・ベイスト・サポート：入学から卒業まで４年間にわたり継続的に支援を受けた大学生が、どのように

Web 支援システム上で物語共有による経験的学習を通じて成長していったかを描写し、単一事例質的研究法を用いて、発達障害大学生への支援法のモデル化を行った。

４．研究成果

（１）研究１の結果：

富山大学は、2007 年度から「『オフ』と『オン』の調和による学生支援－高機能発達障害傾向を持つ学生への支援システムを中核として一」と題するプロジェクトを開始した。このプロジェクトでは，社会的コミュニケーションに困難を抱える学生への支援を中核に据えながらも，ユニバーサル・デザインの考え方を援用し，全ての学生への包括的なコミュニケーション支援システムを構築することを目標にするものである。この目的を達成するためのミッションとして、トータル・コミュニケーション・サポート（Total Communication Support：TCS）というコンセプトが採用された。

TCS は、１）コミュニケーションについて生じるすべての問題を支援の対象とする、２）支援のためのマルチアクセスの方法を確保する、３）支援者への支援（メタ支援）を重要視する、４）高大連携、社会参入等を視野に入れた縫い目のない支援（シームレス支援）を目指す、という４つの特性を持っている。

Web を通じた支援システムとしての PSNS の企画とシステム構築は 2007 年にスタートした。まず Web 支援システムを学生支援に役立てている先進的な国内外の施設を見学し、ノウハウの提供を受けるとともに、暫定版のシステムを構築して限られたメンバーによる試験運用を行った。2008 年 4 月からは、各学部教授会において PSNS の趣旨の説明を行い、許可の得られた学部から順に、教職員および学生を PSNS へ招待する作業を開始した。

システムのハード面は、基本的には株式会社手嶋屋が開発したオープンソースである OpenPNE ver.2.10.7 をベースに開発され，学内のみならず，インターネットに接続できる環境であれば，PC および携帯電話からのアクセスが可能である。PSNS へのログインは、ID として大学から発行されている電子メールアドレス、および任意のパスワードを入力することによって行われる。PSNS を通じた通信は，SSL（Secure Socket Layer）プロトコルを用いて行われ、通信中のデータの盗聴やなりすましが防止されている。PSNS を利用することで、学生は「日記（ブログ）」や SNS 内ユーザーの参加と閲覧範囲を限定して教職員が運営できる電子掲示板機能の「コミュニティ」、特定のユーザーに対する私信送受信機能の「メッセージ」への投稿等を通じて，時間や場所を問わず、関係する教職員や学生とコミュニケートすることができる。また，「マイフレンド」リンク機能を利用して、日記公開範囲（マイフレンドまで公開と全体公開を選択可能）に応じて相談内容を変化させることができる。加えて、自分のページへの他ユーザーの訪問履歴を確認できる「あしあと」や「コメント」機能により、自身の書き込みに対する他ユーザーの関心を簡便に推定することができる。

PSNS システムの運営方針については、当初暫定的な方針からスタートし、教授会や各種の委員会等において、疑問点や意見を幅広く聴取し、方針の変更と改善を漸進的に行った。TCS は 2007-2010 の 4 年間に、述べ 60 人の発達障害のある、あるいは発達障害傾向があると判断された学生の支援を行ったが、一部の学生はオンライン支援である PSNS も並行して利用した。PSNS には、富山大学の構成員（学生、教職員）であればだれでも参加できるので、支援を受けている学生のみが利用しているわけではなく、2010 年度末の時点では、全構成員の約 50％が登録し、活発に利用している構成員は約 20%である。

（２）研究２の結果：

分析の対象は 2009 年 4 月から 10 月までに投稿された日記 2589 件のうち、新入生によって投稿された全体公開日記 1047 件のログである。

質的分析の方法は、木下によるグラウンデッド・セオリー・アプローチ変法を応用し、ログのテクストから直接暫定的な概念を生成し、連続比較分析を行うことによって以下の８個のカテゴリー（C1～C8）が生成された。「C1:不安ですが、がんばります」「C2:誰か教えてください！」「C3:たいへんなことがありましたーでも大丈夫でした」「C4:探してください！」「C5:みなさん、注意してください！」「C6:趣味について語ります」「C7:自分について語ってみます」「C8:宣言します！」。

質的分析の結果は以下のようにまとめられた。１）新入生達は、入学直後から、新しく未知の体験である大学生活に適応するために、PSNS を自発的かつ積極的に利用していた。２）新入生達は PSNS 上においてマイフレンドを増やすことには熱心でなく、主として全体公開日記において、不特定多数の読者に対して、日々刻々と生起する事件、困りごと、不安などを表現するとともに、趣味や自己省察を語り、読者への呼びかけ、決意宣言などを行っていた。３）新入生達の PSNS 上での語りは、大学の危機管理システムへの有益な情報として機能していた。４）新入生達にとって危機的と思われる経験の多くは、「事件の生起」→「物語の展開」→「洞察を伴う終結」という物語構造を通じて語られており、多くの場合、上質のユーモアを含む表現が用

いられていた。５）読者としての PSNS 管理者や、同僚の学生や教員の存在は、彼らの「語り」と「経験の意味付け」を支える「共感的な目撃者=証人」として機能していると思われた。

（３）研究３の結果：

本研究では、原因不明の嘔気を訴える女子大学生と治療者の Web を通じた対話の実例を提示することにより、「一人一人が異なる個別の患者」への対応について、ナラティブ・アプローチの観点から考察した。

大学生という 10 代後半から 20 代半ばまでの集団は、病院などの医療機関を受診する人々とは異なり、純粋に身体的な側面からだけ見るならば、極めて健康度の高い集団である。しかし機能的な症状を慢性的に訴える大学生は決して少ないとは言えず、多くの場合心身相関的なメカニズムを十分考慮しなければならない。PSNS を利用する学生や教職員は、日記機能、コミュニティ機能、メッセージ機能などを通じて、自由に情報発信したり、教職員や保健管理センターや学生支援センターのスタッフに相談したりすることが可能である。

今回の事例研究の対象となった A さんの事例は、通常の診療とはかなり異なった交流である。研究者は、A さんとは、それまで主として Web を通じてのわずかな交流があっただけで、この相談中、相談後も実際に A さんに会ってはいない。つまり、身体的な診察や検査が全く行われていないばかりか、研究者は A さんと顔を合わせてさえもいない。言葉を変えれば、この A さんへの診療（これが診療と呼べるかどうかには異論があると思うが）は、筆者なりの言葉を使うならば、純粋な物語的行為（narrative act）のみを通じて行われた診療であるということになる。

一般に医療者は、医学的に定義され分類された疾患についての記述体系（疾患物語）の観点からものを見る傾向があり、それは患者の視点から見た病いの体験とは多くの場合、甚だしく異なっている。医療人類学者の星野は、患者の体験の多くは、最初から医療の世界において生じるわけではなく、もともとは、生活世界（life-world）で始まるということを強調している。

Web での相談の開始時点では、A さんは今までにあまり体験したことのない「突然の体調の変化」の真っただ中にいた。A さんは自分自身の体調の変化を説明できる一貫性のある物語を構築できず、いわゆる「混沌の物語」の中にいたものと思われる。そこで研究者が試みたのは、A さんの病いの語りをできるだけ引きだし、A さんの体験のシークエンスを有効に意味づけ、かつ現代の医学理論との間に大きな矛盾をもたない物語を共同構成することであった。

研究者が Web メッセージを通じて A さんに働きかけたプロセスを、すでに研究者らが公表している Narrative Based Medicine（NBM）のステップと対照しながらまとめてみると、以下のようになる。

１）questioning（質問）と listening（傾聴）:A さんの身に起こったできごとをどのように体験しているかは、A さん自身に語ってもらわない限り分からない。研究者は、「分からないから教えてください」という「無知の姿勢」にたって、A さんの語りを誘発するために、７つの質問をした。

最初の質問「体調の悪さですが、いつころから始って、どんな感じで続いていて、一番最近はどんな感じか、時間を追って教えていただけますか？」は、物語面接（narrative interview）の冒頭におかれる基本的な質問である。それに続く６つの質問は、日常生活への差し支え、コーピング、解釈モデル、希望、生活背景など、複数の観点からの語りを促進するための質問である。これに対して、A さんは一つ一つの質問に丁寧に答えてくれた。このプロセスを通じて、研究者は A さんの病いの体験を一つの物語として把握しつつ、研究者なりの「A さんの物語についての筋書き（plot）」を作っていく。同時に研究者の質問への解答を執筆することを通じて、A さん自身の物語も整理されて行ったものと思われる。

２）emplotting（筋書き化）、negotiation（物語のすり合わせ）、emergence（新しい物語の浮上）:研究者は A さんの語りを要約し、大雑把なプロットとしてまとめるとともに、医学的な物語（慢性の脱水による悪循環）を組み込んだ新たな物語を提案した。それに対して、A さんは「まさに、吐き気の他に夏バテのような感覚もあって、これはいろいろな事が悪循環となっているなと自分でも思います！」と、感情のこもった返事を返してきた。さらに「先生のアドバイスを実行していきます！！そして、いつまでたっても調子が悪かったり、何か新しい症状が出てきたら、再度連絡します！」という、A さん自身の近未来をも組み込んだ新しい物語を提案した。さらに興味深かったことは、「お祖母ちゃんによる夏バテの物語」という、非専門家による伝統的・民俗的な物語が、「脱水とケトン体の物語」という科学的な物語と結び付けられることによって浮上してきたことである。これは今回の対話の中から浮かび上がって来た古くて新しい物語であると言えるだろう。

医療（のみならず私たちの日常生活一般）とは、次々と生起する、確実には予想できない出来事の連続である。しかし私たちは多くの場合、自分の人生を恐怖に満ちた不確実な

世界であるとだけ認識しているわけではない。なぜならば、この世界に生起する出来事は、必ずしも完全に不確定なのではなく、ある程度予測可能だからである。予測には何が必要だろうか？ それは、刻々と経験する出来事を、時間系列に沿って意味づけながらつなぎ合わせる「物語」が構成できるかどうかにかかっている。物語の一般的な形式は、「はじまり－次々と生起する出来事－おわり」という構造を備えており、その物語が受け入れられることによって、私達は今後何が起こるかのかなり確実な予測を手にいれることができる。それによって私達の不安は軽減し、不安の軽減は心身相関的悪循環を緩和し、本来あるべき状態に復帰することが期待できるとナラティブ・アプローチは考える。

（４）研究４の結果：

本研究の研究協力者は、本プロジェクトがスタートした年に入学し、プロジェクトが終了した年に卒業した女子大学生Ｂ子さんである。B 子さんは文系の C 学部所属で、入学直後に保健管理センターに自主来談した。来室時の主訴は「うつ気分」であり、来室の目的は「病院紹介希望」であった。初回面接は研究者者（斎藤）が担当し、病院を紹介することに併せて、センターに定期面接に通ってもらうことが了承された。

この時点では、TCS プロジェクトはまだ構築されておらず、B 子さんは 3 年生までは、保健管理センターでの定期的なカウンセリング的サポートを受けつつ、キャンパスライフを送ることになった。3 年生になり、本人が就職活動を意識しはじめ、カウンセリングに並行して、修学支援、就職支援、心理教育的支援（自己理解の促進）の必要性が生じて来た。複数の支援者および本人を含めた話し合いの中から、カウンセリングに加えて修学支援を行うことが合意された。直接面談（オフラインサポート）は、トータルコミュニケーション支援室（TCSI）において定期面談を行うことになり、卒業まで継続された。

B 子さんは PSNS にも登録し、マイフレンドである支援者を読者対象とする日記を自発的に投稿するようになった。4 年間を通じて、保健管理センターでのカウンセリングは計 58 回行われた。3 年生から卒業までは、カウンセリングと平行して TCSI における面談を通じた修学・就職支援が行われた。この間に、PSNS 上に 50 編の日記が投稿され、その日記を媒介として支援者とのコメントを通じたやりとりが行われた。修学支援を開始するにあたって、本人の了解のもと、支援者間の情報共有のためのナラティブ・アセスメントが作成され、PSNS のコミュニティを通じて、支援者間で共有された。

本研究の目的は、以下の 2 点に要約される。①社会的コミュニケーションに困難をもつ大学生が、Web と対面による支援を受けつつ、4 年間の大学生活を送る中で、どのように成長、変容していったかの過程を、語りのテクストを分析することを通じて描写する。②高機能発達不均等のある大学生に対する、オンとオフを併用した支援法の改善に役立ち、新たな実践に枠組みを提供する暫定的なモデルを提案する。

本研究は、単一事例質的研究法を援用して行われた。質的研究法とは、①すでにある仮説を検証するための研究ではなく、あらたな仮説やモデルの生成を目指す、仮説生成的研究であり、②環境を統制した実験的研究ではなく、現場において自然に起こっていることを記述・分析する自然主義的研究であり、③データとして数値ではなく主としてテクストを用いる研究であり、④論理実証主義の認識論ではなく、現実は言語を用いた社会的相互交流によって構成されるという、構成論的な認識論を基盤とする研究法である。

データの収集を単一事例に限定することの問題点と妥当性については、すでに論じたように、研究目的と相関的に判断されるべきである。本研究の目的は富山大学における発達障害大学生支援システムという限定的で個別性を有するフィールドにおいて、B 子さんという個別の人間が経験したこと、その意味づけを描写し、その中から新たな実践に応用可能ななんらかの知識資産を生成することを目的とする。このような研究は、効果研究ではなく、質的改善研究として位置づけられるものである。

今回の分析に用いたデータは、①保健管理センターにおける B 子さんのカウンセリング記録（約 24,000 字）、②PSNS 上に公開された B 子さんの日記（コメントを含めて約 40,000 字）、③PSNS 上での支援コミュニティのログ（約 80,000 字）を用いた。

データの分析法としては、PSNS 上に公開されたテクストを中心に、Greenhalgh、Charon による物語分析法に準じた分析を行い。全体の経過を描写するための概念生成法として木下（の提唱した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を応用して用いた。

結果として「ためらいがちのクレーム」「有効化(validation)」「好きなもの語り」「往復書簡」「気付き(awareness)」「共有(sharing)」「誘発された自己開示」「自己アイデンティティの語り」の８個のカテゴリーが生成された。

B 子さんは、保健管理センターでのカウンセリング、トータルコミュニケーション支援室における支援を継続して受けていたが、社会への参入を目の前にして、複数の発達課題をクリアする必要があった。PSNS 日記を利用することにより、B 子さんがもともと持って

いた「省察的な文章を書く能力」を適切に展開させる場が与えられた。B 子さんの日記は、まず「ためらいがちのクレーム」の表現から開始され、支援者はそれを全面的に「有効化」する肯定的応答を繰り返した。支援者からの肯定的応答に支えられて、B 子さんは、自らの「好きなもの語り」を展開させ、次第にその語りは双方向的な「往復書簡」の形式をとるようになった。支援者との相互交流に促進され、B 子さんは複数の「気付き」を明確に表現するようになった。支援者はそれに対して「気付きの共有」を心がけた。B 子さんは、「好きなもの語り」を展開的に語るとともに、それを「自伝的もの語り」へと結晶させ、そこには過去の辛い体験を「書く作業」の中で再体験することが含まれていた。B 子さんの印象的な語りに触発され、支「誘発された自己語り」を交錯させ、濃密な交流が展開した。そのようなプロセスからさらに新しい気付きが生まれるとともに、螺旋状に進展する「自己アイデンティティの語り」へとつながっていった。「自伝的なもの語り」は、さらに大きな課題である家族との歴史の物語を変容させる「家族もの語り」を構成することができるようになり、それは現実の家族との関係の変容にもつながっていった。支援者の働きかけとしては、「有効化」「共有」「誘発された自己開示」等の応答を丁寧に繰り返すことにより、「共感的な目撃者（empathic witness)」の役割を担い、支援システム全体が、「変容の容器」として作用したものと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）
１）斎藤清二：コミュニケーションに困難をもつ女子大学生へのナラティブ・ベイスト・サポート―Web を通じた語りを中心に―. 学園の臨床研究 11：9-30, 2012.（2012.3）査読なし.
２）斎藤清二，西村優紀美，吉永崇史：発達障害学生への対応－富山大学の取り組みを中心として. 精神科 17(4)：358-364, 2010.（2010.10） 査読なし.
３）斎藤清二：高機能発達不均等大学生への支援－ナラティブ・アプローチの観点から. 学園の臨床研究 9:1-12, 2010.（2010.3）査読なし.
４）斎藤清二，西村優紀美，吉永崇史：コミュニケーションサポート. CAMPAS HEALTH 47(2):19-24. 2010.（2010.3） 査読あり

〔学会発表〕（計 23 件）
１）斎藤清二：知識創造動態モデルを用いた発達障害大学生支援システムの構築と運用. 第 52 回日本心身医学会総会, 2011.6.9, 東京.
２）斎藤清二：ナラティブ・アプローチによる発達障害大学生支援. 第 19 回日本 LD 学会, 大会企画シンポジウム「大学における発達障害学生への多様な支援のあり方」. 2010.10.11, 名古屋市.
３）斎藤清二、西村優紀美、竹澤みどり、廣上真理子、角間純子、吉永崇史、松谷聡子、米島博美、桶谷文哲、水野薫：大学新入生のキャンパス・ライフにおいて Web 支援システム（富山大学 PSNS）はどのように貢献しているか. 第 47 回全国大学保健管理研究集会,2009.9.17, 札幌市.
４）Saito S: Narrative-Based Evidence Utilizing Medicine -A story of reconciliation between EBM and NBM in Japan-. Symposium on Narrative Research in Health and Illness, 2009.7.1, London, UK

〔図書〕（計７件）
１）斎藤清二，西村優紀美，吉永崇史・桶谷文哲・水野薫（共著）：発達障害のある高校生への大学進学ガイド―ナラティブ・アプローチによる実践と研究―, 遠見書房. p1-140. (2012.3)
２）斎藤清二，西村優紀美，吉永崇史（共著）：発達障害大学生支援への挑戦－ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント－. 金剛出版, 東京, 2010, p1-274.（2010.10）

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤　清二（SAITO SEIJI）
富山大学・保健管理センター・教授
研究者番号：70126522

(2)連携研究者
西村　優紀美（NISHIMURA YUKIMI）
富山大学・保健管理センター・准教授
研究者番号：80272897
吉永　崇史（YOSHINAGA TAKASHI）
富山大学・学生支援センター・特命准教授
研究者番号：40467121

(3)研究協力者
Trisha Greenhalgh
University College London・教授